

新刊紹介

「日本の昆虫—侵略と攪乱の生態学—」桐谷圭治編, 179 pp. 1986 年発行. 定価 2,800 円. 東海大学出版会.

インセクトリウム誌に「移住する昆虫」を連載した桐谷圭治氏がこの昆虫移住論をより広く展開すべく本学会 44 回大会 (1984 年, 筑波) でシンポジウム「移住昆虫」を主催した. 本書はそこでの話題提供者を中心に企画編集されたものである. 内容は 3 部からなる. 第 1 部日本の昆虫相では木元新作氏が動物地理の立場から昆虫相の地域比較を行っている. 第 2 部侵入者たちでは, ハバチ, アゲハチョウ, モンシロチョウ, アリ, マメゾウムシ, カイガラムシ, オンシツコナジラミとミナミキイロアザミウマ, クリタマバチとチュウゴクオナガコバチ, サンカメイガ, カミキリムシ, 小笠原の移住昆虫, 沖縄の侵入昆虫, ハムシ, ゾウムシ, コブオオニジュウヤホシテントウ, コオロギの移住と適応がそれぞれの専門家によって解説されている. 第 3 部群集の攪乱と再安定では桐谷氏が生態学の立場から移住問題を全般的に総括している. 編者の意図が多様な種を含む昆虫類の移住は多様な事例で検討されるべきであるということにあったので止むを得ないかも知れないが, 第 2 部の各論はそれぞれが一冊の成書になるような内容を 10 ページ以内で紹介されており, 著者と読者双方に欲求不満を残す結果になっている. 内容もたて書き本を意識して平易な解説を試みている著者から, 専門家でもにわかに理解がむづかしい書き方をしている著者まであり, 編集方針にやや統一を欠いているのが気になる. ただし本学会員なら興味をもって読まれると思う. 東海大出版会の「日本の生物—侵略と攪乱の生態学—」シリーズの他書とも併わせて読めば群集構造とそれを構成するそれぞれの種のかかわりが良く理解できるだろう.

(中筋房夫)

Entomological Papers Presented to Yoshihiko KUROSAWA on the Occasion of his Retirement.
S.-I. UENO (ed.), v+342 pp., Mar. 1986. The Coleopterists' Association of Japan, Tokyo.

国立科学博物館動物研究部長の要職にあった黒沢良彦博士が本年 4 月をもって退官するにあたり日頃同博士に何かと関係のあった人士が集い, 博士へのお礼をこめて記念出版物を計画した. 編集には同館上野俊一博士があたり, 黒沢博士の文献目録とともに総計 44 篇の分類学およびその周辺の分野の原著論文が 1 冊にまとめられた. 海外からも黒沢博士と親交のある A. DESCARPENTRIES, S. BILY, W. WITTMER 氏から論文が寄せられている. 内容は大半が黒沢博士の専攻とする甲虫関係であることは当然としても, クモ・ダニ関係 3 篇, 原尾目, トンボ目, 直翅目, アザミウマ目, 異翅目, 同翅目, 膜翅目各 1 篇, それに鱗翅目の 4 篇なども含まれている.

紹介者自身も執筆者の 1 人であるが, こうした記念出版物は関係者以外にはなかなか目に触れることがないので, 敢えてここに紹介する次第である. 残部は TTS 昆虫図書に委託されているので, 希望者はそちらへ申し込まれたい (定価 8,000 円).

(山崎柄根)

「ミバエの根絶—理論と実際—」石井象二郎・桐谷圭治・古茶武男編, 391 pp., 1985 年 12 月発行. 定価 9,000 円. 農林水産航空協会.

不妊虫放飼法によってウリミバエは久米島・喜界島から根絶され, ミカンコミバエが小笠原から根絶された. 「革命的」といわれた不妊虫放飼法が世界で 20 年以上失敗を続けているなかで日本だ